

Hamlet の 悲 剧

佐々木 隆

序

史上最初のまとまった *Hamlet* 論を書いたとされる Thomas Hanmer が

Had *Hamlet* gone naturally to work, as we could suppose such a Prince to do in parallel Circumstances, there would have been an End of our Play. The Poet therefore was obliged to delay his Hero's Revenge¹⁾.

と結んでしまう批評以来、今まで様々な *Hamlet* 論が展開されているが、そのアプローチの方法も多種多様である。*Hamlet* のある一面にだけ光をあてようすれば、残りの部分に影を投げかけることになる。しかしながら重要なことは、どの一面に光をあてるかということであろう。*Hamlet* 論を進める上で、主人公 Hamlet を無視することは全く考えられない²⁾。Hamlet がどのような人物であるかを知るには、Hamlet 自身の言動が大きな鍵を握っている。もちろん他者とのかかわり合いは、Hamlet の人間観から発せられるものである³⁾。従って、Hamlet の人間像を探ることで *Hamlet* の世界の謎を解き明かしてゆきたい。

The First Act

佐々木

Hamlet がどのような状況下に置かれ、何を考え、どうふるまっているかを知る上で、第 1 幕第 2 場は重要である。Claudius は Gertrude との結婚のいきさつを第 1 幕第 2 場の冒頭で明らかにしている。しかも Claudius の独断ではないことも明らかにしている。政治的配慮を考えての結婚であることを強調している。これ以後は、Fortinbras が Norway 先王の失地回復のため暴挙を企てようとしていることにふれている。もちろんこのことは、第 1 幕第 1 場での Horatio の言葉からも伺えることである。Claudius は Laertes に France への帰国を快く認めると、Hamlet に ‘But now, my cousin Hamlet, and my son.’ (1. 2. 63) と話しかける。Hamlet の反応は、Claudius に対してある種の対抗意識を持っているかのように、‘A little more than kin, and less than kind.’ (1. 2. 65) という最初の傍白と、それに続く ‘I am too much in the sun.’ (1. 2. 67) という地口においても同様に示されている。Hamlet が先王の死を悲しんでいることは、Gertrude や Claudius の言葉からも明白なことである。しかも、Claudius に対して何らかの対抗意識を持っていることも、傍白と地口から明白なことである。Gertrude との結婚から始まり、Fortinbras 対策、さらに Hamlet への王位継承を公にしているのである。そして、Hamlet の第 1 の独白⁴⁾が始まるのである。

O, that this too too solid flesh would melt,
Thaw, and resolve itself into a dew!
Or that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter! O God! God!
(1. 2. 129-132)

この独白の最初の 2 行は自己嫌悪を表し、その次の 2 行は自殺を表している。しかも最初の 2 行のことが原因らしいことがわかる。Hamlet はさらに、

How weary, stale, flat, and unprofitable,
Seem to me all the uses of this world! (1. 2. 133-134)

Hamlet の悲劇

と、この世の営みを嘆いている。挙句の果てには、この世が ‘an unweeded garden’ (1. 2. 135) とまで言うに至っているのである。この嘆きの原因は、母親の再婚にある。しかもこの再婚は、‘O, most wicked speed’ (1. 2. 156) とかなり早急に行われ、しかも ‘married with my uncle’ (1. 2. 151) であるために、‘incestuous’ (1. 2. 157) になっているのである。これが Hamlet の本心であろう。Hamlet の Claudius に対する態度が、反抗的なことはわかる。さらに、Hamlet が信奉していた愛を誓ったならばそれを守り通すという人間観が、もろくも崩れ去っている。‘Frailty, thy name is woman!’ という 1 行は単に母親に対する嘆きではなく、女性一般にまで広げられ、さらに、人間一般にまで広げられたものであろう。独白の冒頭あたりでの自殺願望が、人間不信にまでその原因を求めることができるのである。さらに、母親の急な結婚について、

O God! a beast that wants discourse of reason
Would have mourn'd longer.

(1. 2. 150-151)

と Hamlet は「理性」を欠いた母 Gertrude の行為を責めている。E. M. W. Tillyard によれば、この Gertrude の罪は、人間の品格に対してでなく、存在の全体系すなわち世界に対する罪なのである⁵⁾。第 1 独白が終ると、Hamlet は Wittenberg から来た Horatio と再会する。Horatio と前の晩に歩哨に立った Marcellus と Bernardo の話を聞き、亡靈の出現を知るに至る。Hamlet も見張りをすることになり、その晩、王が開いた宴について、ひどい習慣であると言ったあとで、その考えを一気に人間観にまで高めているのである。いくらその人に美德があったとしても、たったひとつの欠点のためにだめになってしまうという人間観である。しかし、この人間観は第 1 独白に見られた人間不信に基づくものであるから、当然かもしれない。そういうしているうちに、亡靈が現れるのである。亡靈から父の死に関する事実を聞かされる。

佐々木

亡靈は Hamlet に ‘I am thy father’s spirit.’ (1. 5. 8) であることをはっきりさせ、Claudius に殺されたことを伝え、さらに ‘Revenge his foul and most unnatural murder.’ (1. 5. 25) と、Hamlet に復讐を迫り、‘leave her to heaven’ (1. 5. 86) と Gertrude に対する対応にも指示を与えていく。

Hamlet は亡靈との対話の直後で、第 2 の独白をしている。この独白では、亡靈によって知らされた新しい事実と、それによつてわる事柄を忘れてはならぬことを自分に言い聞かせている。第 1 独白では、母 Gertrude への不信から人間不信に陥った Hamlet であるが、ここではさらに、父の死が実は Claudius による殺人であったことを知られ、さらにはその復讐までも命じられるに至っている。第 1 独白の人間不信はさらに高まり、‘O most pernicious woman!’ (1. 5. 105) と母親をなじり、さらに ‘O villain, villain, smiling damned villain.’ (1. 5. 106) と Claudius をなじるのである。第 1 独白とこの第 2 独白でも母親に対する言葉には厳しいものがある。母親の再婚相手は亡父の弟の Claudius であり、亡靈の言葉によると父を殺害した張本人であることが明らかになっている。Hamlet は、第 1 幕第 5 場の最後で

The time is out of joint. O cursed spite
That ever I was born to set it right! (1. 5. 189-190)

と、この世の亂れについて口にするのである。この台詞は、第 1 幕をしめくくる重要な台詞である。Hamlet は自らの使命を果たさなければならないのである。この台詞は、ただ亡靈からの命令を遂行すればよいというようなものではない。しかもこの任務を積極的に取り組むというよりは、‘O cursed spite’ とあるように、負担に感じているのだ。人間不信に陥った Hamlet のまさに叫び声である。

The Second Act

Hamlet の悲劇

第2幕では Hamlet が以前の Hamlet ではなくなっていることが城内で噂になっている。Claudius, Gertrude, Polonius がそれぞれ狂気の原因を探ろうとする。Claudius は Hamlet の狂気の原因を探らせるために, Rosen-crantz と Guildenstern を呼び寄せ, Hamlet はこのふたりの幼なじみと会うことになる。彼らとの対話の中で Hamlet は, ‘What a piece of work is a man!’ (2. 2. 303) で始まる台詞でその人間観を示している。Hamlet によると, 人間とはまず第1に ‘How noble in reason’ と高い理性を挙げているのである⁶⁾。人間不信に陥っている Hamlet が, この世の亂れを正そうとしている Hamlet が, 人は理性が高いゆえに素晴らしいと賛美していることは注目しなければならない。この Hamlet の考え方には, 当時の時代背景からも伺えることである⁷⁾。理性が充分備わっていても, Iago や Edmund のような悪人もいるわけであるから, この「理性」をどう使うかが人間の価値を決めると考えなければならない。

到着したばかりの役者の演技が終わり, the Murder of Gonzago の芝居に必要な台詞を付け加えることを役者に頼んだあとに第3の独白が来る。この独白の前半は, 役者が作り事にも涙するのを見て, Hamlet はそれを己に投影するのである。Hamlet はぐずぐずしている自己を非難するのである。しかし, この姿勢は, 人間不信に陥り, この世の亂れを正す使命を負った Hamlet が,これまでの自分ではいけないのだということを自分に言い聞かせているのである。Hamlet の関心は,

Bloody, bawdy villain!
Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain!
(2. 2. 575-576)

と Claudius へと矛先が向けられているのだ。Hamlet は亡靈の言うことだけでなく, ‘I'll have grounds/More relative than this.’ (2. 2. 599-600) と自分の目で確かめようとする姿勢が見られる。これまでの Hamlet には見

佐々木

られなかった姿勢である。しかも、この考えは、Horatio にも Claudius を観察するように依頼するのだから、Halmet が確認しようとすることへのこだわりがよく表わされている。しかも、Hamlet が自ら企てたことを考えると、この劇中劇の持つ重要性は無視できるものではない。

第2幕は Hamlet の第3の独白で締めくくられている。第1幕を締めくくる ‘The time is out of joint.’ (1. 5. 189) に始まる台詞では、Hamlet が何をすべきかについてはかなり漠然としているが、この第2幕の終りでは、はっきりとした方向性が打ち出されているのである。

The Third Act

第3幕は、劇の構成から見て中央に位置している。しかもこの第3幕には ‘To be, or not to be’ に始まる第4の独白、尼寺の場面、劇中劇、Claudius の祈りの場面、Gertrude の寝室の場面と Hamlet を理解する上で重要な場面が続く。

劇中劇が行われる前に Hamlet は第4の独白をする。

To be, or not to be—that is the question;
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune.
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them? (3. 1. 56-60)

この第4独白は、これまでの3つの独白とは趣きが違っている。これまでの3つの独白は、‘O’という間投詞から始まることからも伺えるように、感情的になっている面がある。ところが、この第4独白では、‘To be, or not to be’と哲学的な問題を取り上げているのである。注目すべきはその後の ‘Whether 'tis nobler’ ということであろう。つまり、精神的な問題なのである。この第4独白は、この精神的な問題に正面からぶつかり、結局はどちらとも決め

Hamlet の悲劇

かねていることがわかる。ただ、いづれにしても死を意識していることは確かな事である。

第4独白のあとに、いわゆる尼寺の場面があり、その中で、Hamlet は自己分析を行っている。尼寺の場面にしろ、劇中劇の前のことであるのだ。劇中劇について Hamlet は Claudius の反応を見逃さないように、Horatio に頼むのである。Hamlet は Horatio を素晴らしい人物としてたたえている。その理由は、Horatio が ‘blood and judgement are so well comedded’ (3. 2. 67) だからである。Hamlet が「情熱」と「理性」がほどよく調和している Horatio をたたえるのは、Hamlet の一個人の人間観と言うよりはむしろ、エリザベス朝のものと言った方がよいかもしれない⁸⁾。劇中劇によって Claudius が父を殺したことを確かめたあとの第5の独白では、

Now could I drink hot blood
And do such bitter business as the day
Would quake to look on. (3. 2. 380-382)

と、Hamlet の復讐への意識は相当強いものになっている。この激しい復讐への意識はすぐに実行されることはないのである。一方、母親に対しては言葉ではどんなに厳しく責めても、決して手は使わないと言っているのである。第6の独白は、母親のところへ行く途中で祈っている Claudius のそばを通り過ぎるものである。

Now might I do it pat, now 'a is a praying;
And now I'll do't—and so 'a goes to heaven,
And so am I reveng'd. (3. 3. 73-75)

第5独白での復讐への相當に強い意識と同様に、復讐に対する Hamlet の気持ちがわかる。しかし、Hamlet はこの場では復讐を果たさないのである。そ

佐々木

れは一体何故であろうか。Hamlet が復讐のために時や場所を選んでいるのに対して Laertes が教会の中でもやってのけると言っているのとは全く対照的である。Hamlet の復讐の真意とは一体何か。Claudius をただ殺すことが復讐であろうか。このことは、祈っている Claudius を殺そうとしなかったことからも明らかである。Hamlet は Claudius が救いようのない罪業を犯して、その魂が地獄へ落ちる時に、剣を振ると条件を付けている。つまり、第 4 独白で ‘nobler’ を問題にしていたのと同様に、精神的なものを問題にしているのである。Hamlet が如何に人を殺すことを真剣に考えていたかは、王妃の寝室での Gertrude との対話の中で、‘What wilt thou do? Thou wilt not murder me?’ (3. 4. 21) と Hamlet に問いただすと、‘Help, Help, ho!’ (3. 4. 29) と思わず叫び声を上げ、これに反応した Polonius が殺される場面で明らかである。Gertrude が Hamlet に本当に殺されるのではないかと思うほど、Hamlet には殺気があったと見てよいだろう。Hamlet は母 Gertrude との対話の中で、母を厳しく悟し、その結果、Gertrude は ‘O, Hamlet, thou hast cleft my heart in twain.’ (3. 3. 156) という状態になるが、Hamlet はそんな Gertrude にいい方だけを残して、清らかな日々を過ごすように勧めている。これは第 1 幕で見せた人間観とは違う。第 1 幕では、たった 1 つの欠点のために他の美点を無駄にしてしまうというものであったが、ここでは良い点を如何に生かすかという考え方である。Hamlet の持っている人間観に変化が生じていことがわかる。

The Fourth Act

第 4 幕の冒頭は Polonius の遺体の搜索から始まる。Hamlet の存在を危険に感じた Claudius は、ついに英國への使者という形で Hamlet を追放してしまう。英國行きの途中で、Hamlet は領内通過中の Fortinbras の軍勢を見たあとに、最後の第 7 の独白がある。この独白の冒頭では、

Hamlet の悲劇

How all occasions do inform against me,
And spur my dull revenge! (4. 4. 32-33)

と復讐の意識を高めようとしている。そして、‘What is a man’ (4. 4. 33) と人間の本質について考えるのである。

Sure he that made us with such large discourse,
Looking before and after, gave us not
That capability and godlike reason
To fust in us unu'sd. (4. 4. 36-39)

人間にとて大事なものは、理性であると言っているのである。そして、

Rightly to be great
Is not to stir without great argument,
But greatly to find quarrel in a straw,
When honour's at the stake.
(4. 4. 53-56)

と、死と危険に敢然と立ち向うには、命をかけるだけの理由が重要であると言っている。ここでは名譽にかかわっていることであれば、それに値すると言うのである。Hamlet はこの独白の中で、第 1 幕から感じられた人間不信、さらには第 4 独白での死への疑問に自ら解答を見つけ出している。人間には、「理性」が重要であり、これをうまく使わなくてはならないのだ。しかも、‘Looking before and after’ (4. 4. 37) によって、さらに一段高い所に登ろうとしている Hamlet の姿が伺える。この最後の独白をあとに、Hamlet は墓掘りの場面まで登場しない。

The Fifth Act

佐々木

第5幕は墓掘りの場面で始まるが、Hamlet が英國から帰国したということに意味がある。つまりは、舞台から姿を消していた Hamlet がこの場面に登場することは大きな意味があるということなのだ⁹⁾。英國からやっとの思いで帰国した Hamlet は、Horatio と共に墓場を通りかかる。墓掘りとの対話から Hamlet が人の死をどう考えているかがわかる。結局、人間の帰りつくところは、あさましい道具、つまり酒樽の栓になりかねないと考えるのである。第4独白では死の不安のために、結局、決めることのできなかった Hamlet は、人間の死の実体をここに見ることになるのだ。やがて、この墓穴が Ophelia のためのものであることを知るのである。

第2場では Hamlet は、英國行きの途中で起こったことを Horatio に語っているが、この対話の中で、

There's divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.

(5. 2. 10-11)

と言っているが、これまでの Hamlet に見られなかった考え方である。しかし、この Hamlet の胸の内は Claudius への復讐を果たすために、良心がうずくこともないという思いが占めているのである。ところがその直後で、Macbeth が妻の死によって寂しさを一層感じたのと同じように¹⁰⁾、Hamlet はさらに

And a man's life's no more than to say 'one.' (5. 2. 74)

と人間の人生のはかなさを語るのである。Hamlet は、

There is a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come—the readiness is all. Since no man owes of

Hamlet の悲劇

aught he leaves, what isn't to leave betimes? Let be.
(5. 2. 212-217)

と重要なことは、‘the readiness is all.’ と一連の考え方をまとめている点である。Hamlet が最後までこだわっていたものは、死後に ‘a wounded name’ (5. 2. 336) が残るのではという不安である。そのために Horatio は一連の成り行きを話すようにと頼むのである。Hamlet は ‘there is a special providence.’ (5. 2. 212) があると言っておきながら、‘a wounded name’については Horatio の力を借りてこれを防ごうとしている。結局 Hamlet が行きついた所は、

report me and my cause aright
To the unsatisfied. (5. 2. 331-332)

であり、さらには、‘To tell my story’ (5. 2. 341) と言って、Hamlet は「私」に関わることを Horatio に伝えてくれるように頼むのである。しかも、Horatio が一連のいきさつを説明するその内容とは

Of carnal, bloody, and unnatural acts;
Of accidental judgements, casual slayings,
Of deaths put on by cunning and forc'd cause:
And, in this upshot, purposes mistook
Fall'n on th 'inventors' heads-all this can I
Truly deliver. (5. 2. 373-378)

である。この中に Hamlet が求めた「理性」は感じられるだろうか。これが「理性」と「情熱」のバランスのきれた Horatio の目に映った事実であるた。

佐々木

結　　び

Hamletは何度も決意を固めながら、最後の最後まで行動しなかった。行動しなければならない状況に追いつめられて、初めて行動するのである。つまり、それまでは、さながら Edgar のように ‘Ripeness is all.’ (5. 2. 11) と待っているということである。問題なのは、いざ行動を起すまでに Hamlet が何をしたかであろう。もし Hamlet がただ単に状況に左右され、全く受動的な態度であれば、無気力な Hamlet の姿を見せてはいたはずである。

復讐の問題は、Hamlet が復讐にどのようにかかわるかを明らかにすることで、Hamlet の人間像、ひいては彼の人間観が浮き彫りにされる。しかも、Hamlet は復讐を自分の手で果たしているわけであるから、そこには Hamlet の主体性が当然認められるべきである。Hamlet は亡霊から父の死の真相を聞かされ、復讐を誓った。亡霊との対話については、Horatio 等にも話していない。Hamlet は亡霊の正体をあれこれ考え、復讐にやみくもに突進することはないのだ。

Hamlet は第 1 の独白で神の撻があるが故に自殺はできないと言いつつ、復讐については聖書の言葉をなぜ思い出さないのか。聖書では復讐を禁じているだけではなく、認めている面もあるのである¹¹⁾。しかし重要なことは、当時的人がどちらと結びつけて考えているかということだ¹²⁾。復讐劇の伝統を重く見る批評家もいれば¹³⁾、復讐は所詮悪なのであり¹⁴⁾、正義の名を持ってすりかえることはできないと主張する批評家もいる¹⁵⁾。Shakespeare と同時代人の Bacon (1561-1626) は復讐について ‘Revenge is a kind of wild justice.’¹⁶⁾ で始まる「復讐論」を展開させている。最初は法的な根拠に関してふれているが。そのなかほどで、

The most tolerable sort of revenge is for those wrongs which there is no law to remedy; but then let a man take heed the revenge be such as there is no law to punish;¹⁷⁾ ...

Hamlet の悲劇

と、ある面では復讐を認めている。Bacon はさらに ‘public revenge’ と ‘private revenge’ にふれ、この論を締めくくっている。いずれにしても、復讐をすすめているわけではないのだ。Hamlet は Horatio に復讐の助力を求めていない。このことは、復讐が所詮は Hamlet 個人の問題であることを表しているのではないだろうか。墓掘りとの対話では、どんな偉い人間でも死んでしまえば塵となることを知り、人生のはかなさを学んだはずの Hamlet が、結局は、自らの正しさを求めるために Horatio に生きながらえよう頼むのである。もし Hamlet が真に人生のはかなさを心得ていたなら、死んで塵となる自らのことに執着はしなかっただろう。

だからといって、Hamlet は *The Tempest* の Prospero のように理性で

the rarer action is
Virtue than in vengeance; (5. 1. 27-28)

と、復讐をあきらめるようなこともないのである。もし Hamlet も Prospero のように

Now I want
Spirits to enforce, art to enchant;
And my ending is despair
Unless I be reliev'd by prayer,
Which pierces so that it assaults
Mercy itself, and frees all faults.
As you from crimes would pardon'd be.
Let your indulgence set me free.
(Epilogue 13-20)

と、慈悲深くなり、罪の許しを祈る境地に達していれば、当然復讐など起こらないのである¹⁸⁾。

佐々木

最後に Fortinbras が登場するのは偶然ではない。それぞれ原因こそ異なるが、父を殺された3人のうち、Fortinbras だけが生きて最後に登場するにはそれなりの意味があろう。Laertes と Fortinbras のふたりは、A. C. Bradley が言及している様に、Hamlet とは対照的であり、Hamlet の人間像を一層はっきりさせている¹⁹⁾。いずれにしても復讐をしなかった Fortinbras だけが生きているのは事実である²⁰⁾。

Hamlet は人間不信に陥ったことで、これまでの人間像を崩壊させたのである。そして新しい自己に生まれかわろうとした。ある時は神を意識し、またある時は「人間とは何か」という問いを投げかけては、「理性」の重要性を感じるのである。自殺は神の掟に反しているという理由からこれをあきらめるが、復讐については神の掟に照らして考えることを全くしない Hamlet。「理性」を持ちながら、復讐を果たそうとした Hamlet。復讐を考える時には、「情熱」を高めようとした Hamlet。この Hamlet の自己矛盾は、この時代の姿でもある。この矛盾の中で生きた Hamlet は、相手に慈悲をかけることも、許してやることもできなかったのである。

TEXT

Peter Alexander (ed.), *William Shakespeare The Complete Works* (Collins, 1983)

NOTES

- 1) Thomas Hanmer, "Some Remarks on the Tragedy of Hamlet" (1736); reprinted in *Casebook Series Hamlet* (Macmillan, 1979), p. 22.
- 2) T. S. Eliot, 'Hamlet' (1919); reprinted in *Selected Essays* (Faber & Faber, 1980), p. 141.
- 3) Kenneth Muir, *The Great Tragedies* (Longman, 1963), p. 8.
- 4) 独白の教え方は Harry Levin の *The Question of 'Hamlet'* による。
First Soliloquy : I. ii. 129-159
Second Soliloquy : I. v. 92-112
Third Soliloquy : II. ii. 543-601
Fourth Soliloquy : III. i. 56-79

Hamlet の悲劇

Fifth Soliloquy : III. ii. 378-389

Sixth Soliloquy : III. iii. 73-96

Seventh Soliloquy : IV. iv. 32-66

- 5) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (Penguin Books, 1972), p. 84.
- 6) M. M. Badawi, *Background to Shakespeare* (Macmillan, 1983), p. 56.
- 7) M. M. Badawi, p. 49.
- 8) E. M. W. Tillyard, p. 83.

この Horatio の性格についての Hamlet の台詞については、M. M. Badawi もコメントを加えている。(M. M. Badawi, p. 57).

- 9) Maynard Mack, "The World of Hamlet" (1952); reprinted in *Casebook Series Hamlet* (Macmillan, 1979), p. 104.
Mack は演出面についても、ふれている。(p. 104).
- 10) *Macbeth* 5. 5. 19-24.
- 11) 「ローマ人への手紙」第12章第13節「民数記」第35節第19節。
- 12) Linda Anderson, *A Kind of Wild Justice* (University of Delaware Press, 1987), pp. 14-15.
- 13) Fredson Thayer Bowers, *Elizabethan Revenge Tragedy* (Peter Smith, 1959), pp. 39-40.
- 14) Eleanor Prosser, *Hamlet and Revenge* (Stanford University Press, 1971), p. 7
- 15) Eleanor Prosser, p. 7.
- 16) Francis Bacon, (R. Oswald Platt, ed.) *Selections from Bacon's Essays* (Macmillan, 1905), p. 7.
Bacon の "Of Revenge" について、Eleanor Prosser はコメントを加えている。(p. 20)
- 17) Francis Bacon, p. 8.
- 18) E. M. W. Tillyard, p. 84.
- 19) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1981), p. 90.
- 20) Lily B. Campbell, *Shakespeare's Tragic Heroes* (Methuen, 1982), p. 147.